

# 絹とテトロン

## 箏の絃(特に化学繊維)について

第二次大戦の前は勿論、戦後の暫くの間に於いても、箏の絃は絹糸と決まっていたものであった。戦後、ナイロンの繊維が衣料品の材料として普及するに及んで、箏の絃にもナイロン繊維が次第に使われるようになり、ナイロンの絃の強さが珍重されるようになって行った。

元来、箏はその絃を締めるのに技術を要して、初心者には無理であった。絹を原料とした箏の絃は、演奏会用として締めれば一週間とたたぬ間に切れるのが普通であって、それを締めるのは素人の手に負えなかったのである。この糸締めの問題は従来からの懸案であったが、現代でもまだ解決に至っていない問題である。ナイロンのほかにテトロン等の繊維による箏の絃も作られるようになって、化学繊維による箏の絃は非常に普及していった。これらの化学繊維による箏の絃の出現はこの糸締めの問題を一先ず解決してくれたかに見えた。化学繊維の箏の絃は一年位切れないので、練習用の糸としては大変に便利であった。

しかし、化学繊維の絃は強いので、左手によって押し手をする必要のある場合、絹糸を使った場合に比べてはるかに強い力を必要とする事になった。従って化学繊維の絃を用いて押し手をする場合、箏柱に、より近い場所を押さなければ、必要とする音を得られないようになって、その結果、押し手をする時に箏柱を倒してしまう、という現象が多く現れるようになった。

そしてこの、箏柱を倒す、という現象に対応する為に用いられた方法は、箏柱を改造して、その形を変える事であった。箏柱が箏の甲に接触する部分の面積を広げ、箏柱の口前に近い方に突起した部分を付足して従来の箏柱から見れば変形した形の箏柱が作られるようになった。この変形の箏柱は暫くの間、世間に流行したのである。

この変形の箏柱を使うことによって確かに箏柱を倒すことはなくなった。しかし今度は押し手を使う度に左手を離す時に箏柱が動いて、音程が狂う、という現象が現れたのである。それでも箏柱を変形して作る、という方向の努力は今も変わっていない。初期の頃とは形は変わったが、今尚、変形した箏柱が世に多く使われている。そして、押し手を使うと押した手を離す時に箏柱が動いて音程が狂う、という現象はまだ解決されていない。

化学繊維の箏の絃が強くて丈夫である事は大きな特徴であり、利点である事は先に述べた通りである。しかしながら化学繊維の絃は強過ぎる事がかえって欠点として考えられなければならない。元来絃楽器の絃は一年も切れない程、強い必要はないのである。先にも述べたように、化学繊維の絃を用いた場合に左手の押し手を使う場合に、絹糸を使ったより強い力が必要になり、左半身、左肩に力がいいる結果を生んだ。

そして又、左だけでなく、箏爪をはめて絃を鳴らす役目をする右手にも、強い絃に対抗する為に力が必要となり、かくて全身にまで力が要求される用になってしまったのである。

以上の事で分かる事は、化学繊維は絹糸の演奏法を全くと言ってよい程変えてしまった、という事である。

私は二十年間、宮城道雄先生の側にいて箏の音楽を学んだ。宮城道雄先生の演奏は余分な力の入らない、それでいて全身を箏の上につけるような、すばらしいものであった。この演奏法の秘密を私は長年かけて探求し、それを又長年かけて弟子達に教えて来た。現在の所ではこの演奏法は絹糸しか出来ないもので、従って私は絹糸しか使った事はないし、私の弟子の主だった人達も演奏には絹糸しか使っていない。そしてその為に一本や二本の糸締めは自分で出来るような用意がしてあるのである。箏の演奏に当たって化学繊維の絃を用いると、絃が強い為に、小手先での、軽い演奏をするか、又は力まかせの演奏をするか、そのいずれかという事になる。小手先の演奏は勿論物足りないもので

あるし、力任せの演奏は固いものとなり、そして絃の強さは演奏者の手や身体を損なう結果を生んだ。実際に手を痛めた演奏家がいるのである。

現在の所では私は化学繊維の絃を楽器の絃とは思っていないのである。従って私は演奏会は勿論の事、普段の稽古用にも絹の絃を使っている。とは言っても私は化学繊維を全く嫌っている訳ではない。化学繊維の絃で立派な楽器の絃が作られれば、こんなに有難い事はないし、率先してそれを使いたいと思っている。しかしこの為の研究は容易な事ではないと思う。現在の絹糸による箏絃が昔の物より弱くなったような気がするし、若しも化学繊維によるすぐれた箏絃が作られればこれに越した事はないのである。しかしこれは容易な事ではないのである。

絹の糸は引張れば伸びるとい性質のほか、絞まっている絃をゆるめると逆に張って来て、張力が増える、という性質がある。つまり、或る力で締められている絃に更に力を加えて張力を増やすと、絃が伸びて張力が減って来る、これは普通に考えられる性質である。所が或る力で締められている絃をゆるめて張力を減らしてやると、逆に絃が張ってきて張力が増えてくる、という性質もあるのである。このあとの方の性質は化学繊維には無い性質である。化学繊維で箏絃を作る場合に考慮に入れておかなければならない事であろう。

絃楽器の音を決定する音響学的な要素は、絃の長さ、その張力と質量の三要素である。音高を決定するにはこの三要素を適当に組み合わせればよろしい。しかしよい音色を作るにはこの三要素をうまく組み合わせないと、よい音は得られないのである。絃の張力を変える事が出来る。絃の長さは箏という楽器の長さの範囲内で変える事が出来る。それに比べて質量は与えられるもので、その場では変えられないものである。つまり絹糸であれ、化学繊維であれ、箏絃として適当な質量が要求されるのである。

現在の化学繊維の絃は軽くて、質量不足である。従って低音楽器である所の十七絃の絃としては不適當で、使われていない。(編集部注・現在では使用されている)この質量不足は箏絃として使われた場合、音色が軽い、浅い、薄い等の結果として現れる原因の一つとして考えられる事である。

先にも述べたように、現在の所私は化学繊維の絃を使う気はない。私が自分の演奏をする為には現在の所、絹糸を使うよりほかに方法はない。そして絹糸を使うからには糸締め技術を習得しなければならないのである。化学繊維の絃では本格的演奏は不可能である。この箏の絃の問題は箏音楽の根幹に係わる大問題なのである。

私はまだ化学繊維を原料とした絃を使った事はないし、箏柱も古い形の物しか使った事はない。箏に張られた化学繊維の絃はそれに触ってみただけで、弾く気がしないのである。化学繊維の絃は死んでいる、としか私には思えないのである。絹糸は生きている。そして生き物である絹糸を締めるには特殊な技術が必要であった。昔、宮城先生の箏の絃を締めるのは鶴川楽器店の主人、鶴川喜兵衛さんに決まっていた。鶴川喜兵衛さんは糸締めの名人であって、この人が締めた箏しか宮城先生は弾かれる事はなかったのである。従って宮城先生は鶴川さんを大事にしておられたのである。絹糸の糸締めの技術はそれ位、大切な事であるが、今は絹糸を上手に締められる人は非常に少なくなってしまったのである。絹糸を締めた事のない琴屋さんも今では珍しくなくなってしまった。

宮城道雄先生の晩年にはもう化学繊維の絃は世に存在していたが、絹糸以外の絃が使われた事は絶えてなかったのである。

糸締めが難しい事と、化学繊維の糸が丈夫である事が結び付いて、化学繊維の絃が箏曲界に蔓延してしまった。その事によって一時的には初心者にとって糸締めの問題がやや解決され、箏の発展を助けて来たのではないかと、思う。そうして、それが今度は時間の経過と共に今のように箏の音楽をつまらなくさせてしまった大きな原因である、と私は考えている。これを解決する方法は、

一、楽器の絃として優れた、生きている絃を化学繊維を原料として作り出す事。

二、それが不可能であれば、糸締めの技術を習得して、絹糸を使う事。

という事になろう。これだけ化学繊維の絃が蔓延した現在でも、まだ絹糸の絃は絶滅していないので

ある。少数の人々はまだ絹糸を愛し、好んで使っているのである。

私は、化学繊維で優れた絃を作って貰いたいのである。箏柱の変遷に見られるような、表面的な対症療法でなく、根本的な手段を考えて貰いたいのである。それには国家の力か、大企業の力かを必要とする。この研究には十分な資力と時間が必要であろう。そしてその努力は、日本文化の為、という成果を除けば、経済的には報われない努力であろう。伝統を重んじながら、将来への発展をめざす箏曲文化にとって、この事、絃の問題は重大である。

**小野 衛**

会報「創明」No.160号 1993.5.1 所載

**創明音楽会**